

資料展示「病理学者、原子野をゆく」:

広島大学医学部教授・玉川忠太の原爆症への挑戦」

広島大学原爆放射線医科学研究所附属被ばく資料調査解析部 助教 久保田 明子

放射線災害・医科学研究拠点に多大なご理解を賜り共催していただいた、2018年夏開催の資料展示「病理学者、原子野をゆく：広島大学医学部教授・玉川忠太の原爆症への挑戦」について報告する。

1. 玉川忠太 (1897 ~ 1970)

玉川忠太は、広島大学の病理学教室の初代教授となった人物である。岡山医科大学病理学教室の助教授であったが、1945年4月、広島大学の前身にあたる広島県立医学専門学校（医専）の設立が決まり、玉川は6月に着任する（兼任）。医専の開校式は現在の広島大学医学部キャンパスに近い広島市皆実町で行われたが、それは8月5日であった。そのため、設立後数時間で医専は危機的状況に陥る。玉川は5日の夜に疎開していたために直接被爆は免れたが、すぐ原子野の広島市内に戻る。そして、医学部の教員としては大学の再建に尽し、病理学者としては爆心地に近い広島通信病院で初期の貴重な急性症状19例の病理解剖を行った。

当時、広島通信病院の院長であった蜂谷道彦は玉川の岡山大学での後輩であったが、彼の被爆からの日々をつづった『ヒロシマ日記』の中には玉川が多く登場する。それによれば彼は、解剖の許可を出さない県庁に「ヒデー野郎だ、馬鹿じゃ、馬鹿にもほどがある」と吠え（1945年8月27日）、自力で掘立小屋の解剖室を建て（8月28日）、無許可で解剖を始めた（8月29日）。原爆症研究の合間には各地の病院を回り、医学部の立て直しに

奔走しながら、岡山大学でも研究を続けた。最初の解剖を翌日に控えた28日の晩、通信病院での夕食時、「お前らは贅沢だ、贅沢すぎる、こんなに食べてよいのか」と入院する被爆者を笑わせた。社会の大きな危機に直面したときの科学者、医学者の在り方として、圧倒される。壊滅して原子野となった広島で、当時は未知不明の放射線による人体影響を研究すべく無許可で自ら小屋まで建てて病理解剖を実施し、その一方で医学の高等教育の場の再建に尽くし、被災・被爆して傷つく人びとに寄りそう科学者というのはそう多く存在せず、また容易なことでもない。玉川は少しユニークな人物で、後年にはあまり好意的に評されないこともあるようだが、それを上回る気迫と行動力がそこにはあると言えよう。その点ではもう少し見直されても良い、広島大学での原爆症研究のルーツの1つを作った人物であると考えられる。

なお、後半生は闘病生活が長かった。1970年に叙勲が決まったが、その数日前に入院先の広島大学病院で亡くなった。その3日前に「おれは、三日たったら死ぬからな、ふん」と次男に言い、本当にその通りになったとのことである。

2. 資料展示「病理学者、原子野をゆく」

2-1. 展示企画の経緯

2017年、筆者は放射線影響研究所のオープンハウスの特別展示（蜂谷道彦『ヒロシマ日記』刊行とABCC（原爆傷害調査委員会）の関連資料展示）についての調査をしていた。玉川忠太と蜂谷の個人的かつ学術的な交流、そして原爆投下後

に重要な交流があったことは知っていたが、ある日広島大学医学部医学資料館に病理学教室資料として古い『ヒロシマ日記』と紙に包まれた玉川の資料(玉川資料)があることを思い出した。そこで、資料を大切に守っていらっしゃる広島大学大学院医歯薬保健学研究科分子病理学研究室の安井弥教授のご許可をいただき調査したところ、これが、1945年8月末からの剖検の際の、まさにそのときに作成され、アメリカの接収も免れた記録類の原本であることがわかった。以前からそういった資料であったことは伝えられていたが、今回は、それらが正しく原本であることを改めて確認させていただいた(例えば、剖検執刀者である玉川が使った記録用紙が、蜂谷道彦でなければ持ちえないもの(広島通信病院でなければなかったもの)であることなどを確認した。経年劣化の酸化で傷んだ紙にシミなどの汚れが付いたその資料群には本物ならではの迫力があつた。なお、本件については、2017年8月5日に『中国新聞』(西本雅実記者)で安井教授のコメントとともに報道された。

広島大学原爆放射線医科学研究所(以下、原医研)では、「米軍病理学研究所返還資料(以下、AFIP返還資料)」と呼ばれる、アメリカ側が被爆地や研究機関で接収し、1973年までにそれぞれの被爆地に返還した医学資料を所蔵している。玉川もまた広島通信病院や岡山大学でアメリカ側に希少な試料を提出させられていたため、結果的にAFIP返還資料の一部として広島に戻ってきた。そこで、その資料のなかの玉川由来のスライド標本と他の関連文書や映像などの所蔵資料も組み合わせ、上記の玉川資料を中心とした資料展示を企画した。その意図は、広島大学(医学部)が原爆被災にどのように立ち向かっていったのか、ということ(地域と学術研究(教育)機関の在り方)、原爆被災(放射線被災)に直面した科学者(医学者)の在り方ということ(科学者と社会の

関係)について、原本資料を通して「記憶の共有」を図ることである。安井教授、広島大学医学部、放射線災害・医科学研究拠点のご厚情もあつて企画は許された。展示名は『病理学者、原子野をゆく(Pathologist in Atomic Field)』とした。

2-2. 展示構想と実施

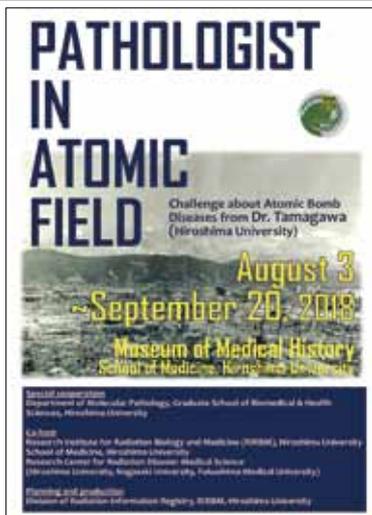
玉川資料の主要は、19例の症例の記録である。そのため、それらをメインとし、1953年刊行の日本学術会議編『原子爆弾災害調査報告集』(日本学術振興会刊)に所収されている玉川の論文や19例の剖検記録を関連付けて展示し、且つ現在の医学研究者の現代からの視点を付け加えることが、医学資料をアカデミックに展示するにはふさわしいとも考えた。しかしながら、スペース、資料保全(セキュリティなど)、経費、想定される参観者を考えて断念した。展示会場が大学病院に隣接していることから参観者は一般の方々も多い。一方、広島大学医学部に属する医学資料館である点から医学部の学生、また医学研究者の来訪も予想できた。しかし、この両方のニーズに応えるような展示の実施は、現在、様々な条件もあつて困難である。

結果、玉川資料のなかの剖検記録の2例と患者1名のスライド標本をメインとし、他は、玉川忠太の足跡を追うパネル、関連書籍などを展示した。また、他の玉川資料として、アメリカの試料接収を示す文書や広島大学の学内文書、玉川の達筆な書跡の研究文書なども出展した。その他、「原子野」のイメージを持ってもらうために、爆心地に近い広島の中島地区(現在の平和記念資料館周辺地区)の被爆模型や原爆投下の前と後の広島の写真を展示した。

書籍は、前掲の『報告書』の玉川の論文部分と、玉川忠太をモデルにした人物が出てくる阿川弘之の『魔の遺産』(広島出身の作家・阿川の小説

のなかで唯一原爆を扱ったものとして知られる。ABCCへの言及があることでも有名)を紹介した。玉川忠太のパネルには「ヒデー野郎だ」等広島弁(岡山弁?)発言も大文字で記載した。

また、今回は初の試みとして英語のポスターとパンフレットを作成した。これは、放影研のあるアメリカ人の研究者が展示を見に行くと行ってくださったことがきっかけであった。



3. 反響など

展示についてはプレスリリースを出し、学長会見でも取り上げていただいた。しかし、時期がちょうど西日本の深刻な災害と重なったこともあり、なかなか宣伝は広がらなかった。そのなかで、NHKの広島放送でニュースとして取り上げられ、共同通信の配信を受けてネットニュースで流れた。展示開始の際は『中国新聞』(馬場洋太記者)がわかりやすく丁寧な紹介記事を掲載してくださった。展示開催は2018年8月3日から9

月20日であったが、休館日や夏季休暇等のため、実質は1ヵ月にも満たない日数であった。しかし、9月1日に『朝日新聞(広島版)』(清水康志記者)が大きく詳細な記事を掲載してくださったことで、後半、特に最終日にかけて多くの方が訪れてくれることとなった。結果、1,000名以上の来場者があった。

今回は展示のアンケート結果が特徴的であった。数量は多くないが、記述の多いものが目立った。玉川忠太先生を知っているという方も来て「よくぞ取り上げてくださった」と言っていた。地元の方々からは「玉川忠太のような人物を知ることができてよかった」、「広島弁(岡山弁)をしゃべる先生に親しみを持った」、「普段目にするののない本を知ることができてよかった」と感想を頂く一方、「内容が少し専門的でわかりにくい」とのご指摘もいただいた。医学部の学生、恐らく広島大学に研修等に來ている外国人、あるいは他大学(研究機関)の研究者も来てくださり、面白いと関心をもっていただいた半面、「もう少し専門的な展示を見たい」との要望も寄せられた。また、愛知県や宮城県など、遠方からの来訪もあった。担当者の力不足で稚拙で地味な展示ではあったが、訪問者側の情報の感受性が高いこともあって、皆様はそれなりに思いを持ってくださったとの感触を得た。

また、ほぼ思い付きで作成した英語のポスターやパンフレットが、実は思いのほか効果があったように感じた。パンフレットの持ち帰り数も想定以上であり、実際、会場では手に取り読みながら鑑賞したり、英語からまた別の言語で説明する方をみかけることもあった。アメリカの医学史研究者からも欲しいという問い合わせが来た。また、筆者がアメリカから来た社会学の研究者を案内した時、自身も便利だった。

4. 今後の課題

展示の主要だった玉川資料は、単に玉川忠太の1945年の足跡だけでなく、広島大学医学部や原医研の被爆に関する調査研究のことや社会に危機が訪れたときの科学者の在り方など、さまざまなことを想起させるきっかけとなる、一つで多角的な視点を生み出す資料であった。しかし、展示者側はそのことを承知しつつも、まずは本物のみが持つ力に任せて、最低限の説明以外はなるべく排除して展示を実施し、来訪者の思考をなるべく自由にしたいと考えた。

ただその結果、説明不足の問題も起きた。加えて、研究機関で発信するならば、専門性の高い展示もまた必要だと感じた。ただ、医学研究（科学研究）を示す資料を一般の皆様にはわかりやすく伝えつつ、専門家（研究者）にも関心を持ってもらうように展示することは非常に高いハードルと痛感している。諸先生方のご教示を頂戴できれば幸いである。

今回は個人情報についても強く留意して展示したが、その個人が見えないことが「捉えにくい（想像しにくい）」とも言われた。8歳の子どもの剖検記録は多くの方が思いをはせてくださったようだが、「この子は一体どこに住んでいる、どんな子だったのかしら？兄弟はいたの？親は？」と聞かれ、返答に窮した。しかし、例え知りえていたとしても示すことはできない。

また、玉川資料や原医研が所蔵する資料は、平和を希求する資料というよりも、その一歩手前の、原爆の実相そのもの、「原爆被爆資料」であり専門性を持つ少し特殊な「科学研究資料」である。つまり、例えば広島平和記念資料館の展示資料とはまた違った側面や意味を持つ資料とも言えるものである。今後もこういった研究資料を社会に発信する際は、その特性を生かすことに強く留意せねばならないと感じた。

また、来訪者の感想やアンケートから、展示を見たその先についても強く思ったことがある。展示活動という社会発信では、資料とそれに付随する記憶や事実に触れた人が、そこから平和を考えるのか、原爆を考えるのか、放射線影響を考えるのか、家族を思うのか、は自由でなければならない。ただ、そのきっかけに科学者の道のり・生きざまや成果があるということは、社会にとって重要で、且つ科学者が社会に還元できる一つの意義のようにも感じた。

筆者は、個人的には1945年のその時に玉川のような科学者が広島にいてよかったと感じた。そして同時に、現在の科学者は玉川が直面したような状況に今後立った場合、何を考え、どう行動するのだろうか、とも考えた。例えば、2011年の福島原発事故の時も、多くの「玉川先生」がいたのではないであろうか。つまり、多くの人は過去の科学研究（科学者）を見て、過去や現在、未来における社会と科学を思い起こし、社会は「科学（科学者）を問う」のだと考える。問われることから逃げられない科学（科学者）を社会とどのようにうまく結びつけられるか（アウトリーチ）、ということは、今後の重要な研究課題としていきたい。

謝辞

本展示においては、広島大学大学院医歯薬保健学研究科分子病理学研究室の安井弥教授を始め、広島大学医学部、同医学資料館には本当に直接的に多大なご協力を頂戴した。また、放射線災害・医科学研究拠点に昨年に引き続いてご理解とご協力をいただいた。この拠点自体が今回の展示で発信した事実から具現化した未来の一つであると考えられる。末尾ながら、心よりの感謝を申し上げます。

※広島大学大学院医歯薬保健学研究科は、2019年4月、大学院医系科学研究科に再編されました。